

# コメニウス研究史に関する試論

相馬伸一

(受付 2015年5月26日)

## はじめに

本論文の課題は、コメニウス (Johannes Amos Comenius; Jan Amos Komenský, 1592–1670) の研究史を、とくに彼の生国チェコに焦点をあてて概観することである<sup>1)</sup>。コメニウスに限らず、研究史の検討は研究推進のために不可欠な手続きである。コメニウスに関して言えば、とくに彼の生地チェコでは、18世紀末以降の民族再生運動の過程において頻繁にとりあげられるようになり、コメニウスに関係する文献は膨大な数にのぼっている。言うまでもなく、ひとつひとつの著作、論文、あるいはコメニウスの著作の編纂と出版は、独自の意義を有する。とはいえ、コメニウスに関する言及はあまりに多く、すべてを読み通して総括することは、チェコの研究者にとってすら容易ではない。しかし、思想史研究においては、ある思想の解釈はその解釈の歴史と不可分であるがゆえに、研究史の総括はなされざるを得ない。それにもかかわらず、この研究史の総括も現に動いている歴史のなかでなされる限り、研究史の総括がなされる時代や社会の文脈と無縁に無色透明になされるわけではない。とくに、チェコは宗教的・政治的・文化的なレベルの大きな変容を何度も経験しており、その過程でコメニウスも実に多様な仕方で描かれてきた。このことは、研究史の総括もさまざまな角度から繰り返しなされ、検証されるべき課題であることを意味している。

日本の教育思想史研究との関連で言えば、グローバル化の進展のなかで研究史の総括は重要である。というのは、とくに第二次世界大戦後のある時期から、日本の教育思想史研究はやや自己完結的な傾向が見られるようになったと考えられるからである。西洋教育の受容期においては、西洋の研究動向に注視することは当然であった。しかし、日本国内の研究体制が確立され、日本語での研究資料や文献も蓄積されるにつれて、研究対象によっては、西洋の人物ですら、日本語で書くことはもちろん、読むこともある程度可能になった。また、ある人物に特化した研究をしている研究者は限られるがゆえに、学界での評価は日本でなされている教育学や教育思想史の研究で共有されている概念等によらざるを得ない。こうした結果、教育思想史研究に限らず、日本の西洋思想史研究は、日本語に訳し、日本語に書くことにこだわり、その蓄積を有するがゆえに、それゆえの独自性や可能性も認められる一方、海外での研究動向を必ずしも考慮しないものになり、いわゆるガラパゴス化に陥るリスクもは

らんでいる。また、ICTの普及以前であれば、これこれの研究があるのを知らなかったという弁明も認められたかもしれない。しかし、現在では、世界各地の研究動向がインターネットを通じてかなり網羅的に把握できるようになりつつある。

そこで本稿では、主としてコメニウスの生地チェコ、および第二次世界大戦中の一時期を除き1918年から1993年までは同一の国家であったスロヴァキアに関する必要に応じてとりあげることをとおして、コメニウス研究を歴史的に概観することを試みる。主として依拠するのは、コメニウスの生誕400年を記念して、チェコのコメニウス研究者ベチュコヴァー (Marta Bečková, 1930-)、チャプコヴァー (Dagmar Čapková, 1925-) らによって著され、ポーランドで出版された『17世紀後半から現在に至るチェコ、スロヴァキアおよびポーランドにおけるヤン・アモス・コメニウスに関する文献』である (引用・参照にあたっては、BČBの略号にページ数で示す)。同書は1991年の出版であるが、いわゆるビロード革命による体制転換以前の1987年周辺に執筆されており、抑制的に書かれていると思われる表現も散見される。なお、チェコの代表的なコメニウス研究者のひとりであるフロス (Pavel Floss, 1940-) が冷戦期のコメニウス研究を回想した文章を含む『接点の時代における考察』も興味深い言及が見られるので、援用する (引用・参照にあたっては、PFの略号にページ数で示す)。また、同書がいわばインサイダーによる回想であるのに対して、チェコの現代史研究者オルシャークヴァー (Doubavka Olšáková, 1977-) がオーラルヒストリーの手法もととりいれ、とくに1971年から1989年までのコメニウス研究をとりあげた『チェコ歴史学の間隙』を同年に出版しているのので、これも適宜参照する (引用・参照にあたっては、DOの略号にページ数で示す)。チャプコヴァーとベチュコヴァーによる研究史の総括は冷戦期までとなっているが、コメニウス生誕400年の1992年からすでに20年以上が経過していることを考えると、その後のコメニウス研究の展開についても若干の記述が必要と思われるので、可能な限り補っておきたい。

ベチュコヴァーとチャプコヴァーは、コメニウス研究の歴史的画期をおおよそ6つの時代に区分している。それらは、①コメニウスの死後からチェコの民族再生期まで、②民族再生期、③1848年から1892年 (コメニウス生誕300年)、④19世紀末からチェコスロヴァキア共和国の成立 (1918年)、⑤1945年まで、⑥戦後のチェコスロヴァキア、である。ビロード革命による体制転換とその後の国際的な研究交流の活性化や方法論の多様化を考慮すると、この時代区分は、ある程度の再考が必要と思われる。



バラツキー

一般的には、コメニウスはその死後長らくその存在が忘れられていたとされる。しかし、画期的な成功を収めた教科書『開かれた言語の扉』 (*Janua linguarum reserata*, 1631) や『世界図絵』 (*Orbis*

*sensualium pictus*, 1658) は彼の死後も何度も再刊されていたのであり、「忘れられた思想家」という記述自体にある含意があることを忘れてはならない。ただ、コメニウスが研究の対象となっていたとはいえないわけで、その意味では、コメニウス研究が成立する前史ともいべき期間が想定される。チェコにおけるコメニウスの本格的な研究が言語学者・歴史学者・政治家のパラツキー (František Palacký, 1798–1876) によって開かれたという理解はほぼ共有されている。ゆえに、コメニウス研究の前史として、コメニウスの死後からパラツキーの登場に至るまでが第一の区切りと見なされるだろう。

パラツキー以後、コメニウスは頻繁にとりあげられるようになるが、その頂点はコメニウス生誕300年にあたる1892年であった。これは諸国民の春と言われた1848年をはさみ、民族再生運動が進められていた時期であり、この期間がコメニウス研究の第一の期間に位置づけられよう。



クヴァチャラ

19世紀末以降、とくにスロヴァキア人の神学者クヴァチャラ (Ján Kvačala, 1862–1934) の貢献によって、コメニウスの学問的な研究体制が確立する。1930年代はナチスの台頭等、社会不安も増大したが、他方、コメニウス後半生の主著『人間に関する事柄の改善についての総合的熟議』 (*De rerum humanarum emendatione consultatio catholica*. 以下、『総合的熟議』と略記) の草稿が再発見されるなど、コメニウス研究の領野が広がった時期であった。そうしてみると、1892年から第二次世界大戦後までを第二の期間と見ることができよう。

1957年、旧ソ連が人類初の人工衛星スプートニクの打ち上げに成功し、東西冷戦が深刻さを増しつつあったこの年は、コメニウスがアムステルダムで『教授学著作全集』 (*Opera didactica omnia*) を出版してから300年にあたり、チェコスロヴァキアをはじめ世界各国で記念の会議が開催され、『教授学著作全集』の復刻やコメニウス研究誌の再刊がなされた。これに向けて研究が進み出した1950年代半ばからを起点として、どこまでをコメニウス研究の第三期とするかについては、さまざまな見方があるだろうが、『総合的熟議』が大判の二巻本としてチェコスロヴァキア科学アカデミー教育学研究所から出版された1966年を経て、コメニウス没後300年の1970年をひとつの区切りと見ることができよう。

周知のように、1968年のプラハの春はワルシャワ条約機構軍の侵入によって抑え込まれ、それ以降、チェコスロヴァキアはいわゆる正常化政策のもとで、言論の自由が極度に抑圧された。しかし、この時代にもコメニウス研究は続けられた。そして、1989年のビロード革命による体制転換を経て、コメニウス生誕400年の1992年を迎えることになる。その後も、2007年に『教授学著作全集』の出版350年を記念する国際会議が開催され、とくに共産主義時代に

は体制から支持されなかったテーマも積極的にとりあげられるようになった。そこで1970年から現在までをいちおう第四期として区切っておこう。コメニウス研究史を概観する上では、隣国ドイツの研究史がきわめて重要であるが、本稿では代表的な事例をとりあげるにとどめる。

## 1. コメニウス研究の前史

コメニウスは1670年11月にアムステルダムで没した。その後、19世紀におけるヨーロッパ各国での国民教育制度の成立とチェコでの民族再生の高まりのなかで注目されるまで、「忘れられていた」と見なされがちである。この理解自体が検討課題なのだが、そのように見なされる背景がないわけではない。主には以下の二点があげられる。

第一は、コメニウスの思想が17世紀の知識革命・科学革命から18世紀以降の啓蒙主義の流れからはそれていたために、思想家としては埋没したという見立てである。たしかに、この見立てを支える有力な事実を列挙することができる。コメニウスは独自の哲学体系としてパ



ベール

ンソ피아 (Pansophia, 汎知学) の研究にとりくみ、その過程で当時の代表的な知識人とも会談した。しかし、感覚と理性と啓示に等しく重要性を認めようとするコメニウスの汎調和の思想は、たとえば知性主義をとるデカルト (René Descartes, 1596–1650) には受け入れられなかった。また、コメニウスは予言信仰の一面があり、晩年、アムステルダムに移ってから、いくつかの予言の書の出版にとりくんだ。こうした動きのなかでコメニウスは神学論争に巻き込まれたが、とくに神学者マレシウス

(Samuel Maresius, 1599–1673) との論争は激しい応酬となった。コメニウスの死後、フランス啓蒙主義に先鞭をつけたとされるベール (Pierre Bayle, 1647–1706) は、大著『歴史批評辞典』 (*Dictionnaire historique et critique*, 1696) において神学的な歴史観を懐疑的に分析するなかでコメニウスをとりあげ、マレシウスの批判に依拠し [BČB: 11]、とくにその予言信仰の非合理性を痛烈に批判した。同様の批判は、18世紀において他にも見られる [BČB: 11]。

第二は、三十年戦争のウェストファリア講和を経て、コメニウスの生地では再カトリック化が強力に押し進められ、コメニウスの著作の多くは禁書目録に登録され、兄弟教団のうちで知られるのみになってしまったという事情がある。コメニウスの著作は他地域からもたらされ、秘密裏に読まれていた [BČB: 7, 12]。パラツキーも、コメニウスが最後の首席監督を務めた兄弟教団を信奉していた家系の出身である。



ライプニッツ



ヤブロンスキー

こうした事情があるにせよ、コメニウスはその死後に早々と忘れ去られたわけではない。それらの事実がチェコ地域で知られるようになったのは、19世紀になってからのことだったにしても [BČB: 11], 17世紀の大陸合理論を代表するとされるライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646–1716) は、コメニウスの死を悼む詩を草している<sup>2)</sup>。また、コメニウスの孫のヤブロンスキー (Daniel Ernst Jablonski, 1660–1741) は、ライプニッツと交流があり、ベルリンの科学アカデミーの設立にもかかわった人物であった。



フランケ

コメニウスの死後に各地に散在していた兄弟教団の信徒たちのネットワークは次第に弱まっていったものの、のちに触れるように、コメニウスの『総合的熟議』の草稿がドイツ敬虔派の拠点であったフランケ (August Hermann Francke, 1663–1727) 創設のハレの孤児院から発見されたように、コメニウスの思想は敬虔派の運動とゆるやかに合流していったとも考えられる。



バルビーン

さらに、教科書作者としてのコメニウスの地位は不動のものであり、イエズス会が大きな影響力を誇ったなかでも、語学教科書『開かれた言語の扉』、『世界図絵』は、内容の一部が問題とされたにせよ、18世紀末に至るまでチェコ語テキストを含めて何度も再刊された [BČB: 13–14]。そして、コメニウス在世当時、カトリック側にもコメニウスの作品を評価する動きがあったことは無視できない。イエズス会士の著述家バルビーン (Bohuslav Balbín, 1621–1688) は、再カトリック化のなかでもチェコ語を評価し、とくにコメニウスの『地上の迷宮と心の楽園』の文体を高く評価していた [BČB: 14]。

18世紀末から、チェコ地域では民族再生の動きが強まっていくが、その当時は、チェコ地域はある意味で再カトリック化が完成していた。民族再生はカトリシズムに立脚した愛国主義としてスタートしたのであり、チャプコヴァーは、バルビーンの評価がコメニウスの位置づけに影響したことはたしかであろうと解釈するとともに、カトリック内部の宗教寛容論のなかでコメニウスが評価されていた事例は他にもあるかもしれないと示唆している [BČB: 14–15]。チェコでは、コメニウスの殉教者としての側面が強調されるなかで、彼が対抗した

カトリックやハプスブルクにおける言及が十分に検討されてこなかったおそれがある。こうした点は歴史研究の課題といえる。

さて、全体として見たとき、たしかに17世紀後半以降のチェコ地域では、コメニウスへの言及が著しく抑え込まれた状態にあったのは事実であろう。そこでチャプコヴァーは、「対抗宗教改革の困難な時代にもかかわらず、チェコ文学がチェコ民族再生の始まりまでスロヴァキアで守られたことは、18世紀終わりの革新の過程に助けとなった」[BČB: 16]と強調する。つまり、スロヴァキア地域はコメニウス等の思想の避難所となっていたというのである。この見立てを支えるいくつかの事実が示されている。たとえば、スロヴァキアがフェルディナント二世 (Ferdinand II, 1578-1637) の布告によってチェコ地域にとどまれなくなった兄弟教団の信徒の亡命先となったこと、そのなかでコメニウスの教授法が影響を与えたこと、コメニウスがポーランドのレシュノから現ハンガリー (当時のトランシルヴァニア) のシャーロシュパタクに赴く際に立ち寄ったこと、トランシルヴァニアとスロヴァキアの継続的な関係があったことなどである [BČB: 17, 18]。そして、チャプコヴァーによれば、18世紀前半にスロヴァキアに啓蒙主義が浸透した際に、コメニウスが再評価されることになったという。

さて、啓蒙専制君主ハプスブルク皇帝のヨーゼフ二世 (Joseph II, Joseph Benedikt Anton Michael Adam, 1741-1790) による宗教寛容令、農奴解放令、出版・検閲制度の緩和、学校の設置等の一連の政策は、彼の死後の揺り戻しがあったものの、チェコ地域にも大きな影響を与えた。逆説的なことに、言語統一令への反発は、民族再生運動のひとつのきっかけとなる。1774年には貴族を中心とした科学者協会が設立され、1773年に帝国内での影響力が過度と見なされたイエズス会が解散させられたといった出来事も加わり、チェコ地域では啓蒙主義の浸透が加速した。

この時期のコメニウスへの言及としては、ドイツ語で書かれた歴史家のフォイクト (Mikuláš Adaukt Voigt, 1733-1787) やペルツル (František Martin Pelcl, 1734-1801) のものがある。それらは、コメニウスの豊かな知性、教授学著作、チェコ語での記述を評価する一方、反ハプスブルクの運動を進めた結果、ハンガリーとポーランドの戦乱が生じ、自身が住

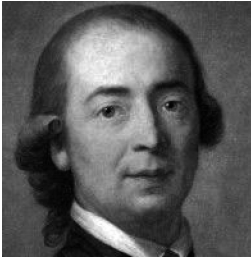


ドブロフスキー

んだレシュノの大火の原因をつくったのではないかといった評価や予言や千年王国主義を批判したものであった [BČB: 23]。チェコ民族再生運動の主要な思想家の一人に言語学者・歴史家ドブロフスキー (Josef Dobrovský, 1753-1829) がいるが、彼は、1792年にボヘミア科学アカデミーの委嘱によって三十年戦争で散逸した文献等の調査を行った。スウェーデンでは、コメニウスの書簡も発見している [BČB: 25]。ドブロフスキーはチェコ語が学問的な表現の手段として十分なものになるかについては懐疑的だった

が、コメニウスのテキストをチェコ語の模範と見なした。この他、チャプコヴァーは、啓蒙主義的な教育政策の反映としては、チェコ人貴族の軍人キンスキー（František Josef Kinský, 1739–1805）が図画を用いた教育方法を強調し、1779年に『世界図絵』を軍事アカデミーで導入したことなどをあげている [BČB: 27]。

## 2. パラツキーの登場と民族再生運動期



ヘルダー

18世紀末以降、コメニウスへの注目が高まった大きな要因として指摘されてきたのは、ドイツの哲学者・文学者ヘルダー（Johann Gottfried von Herder, 1744–1803）によるコメニウスの評価である。ヘルダーは、独自の哲学的思索から、人間性という観点からの歴史記述を構想したが、フランス革命に際して綴った『人間性促進のための書簡』（*Briefe zur Beförderung der Humanität*, Riga, 1795）のなかでコメニウスをとりあげた。ヘルダーは『総合的熟議』第一部『パンエゲルシア』（*Panegersia*）のことも知っており、歴史哲学に関する言及においてもコメニウスを引いている。彼は『パンエゲルシア』をドイツ語に訳そうと望み、ドイツの哲学者のクラウゼ（Karl Christian Friedrich Krause, 1781–1832）が、1811年に抄訳している。クラウゼのチェコ知識人への影響はのちに及ぶ。

コメニウスの再評価におけるヘルダー等のドイツ知識人の役割については、マサリク（Tomáš Garrigue Masaryk, 1850–1937）の有名な解釈があるが、チャプコヴァーは、マサリクのテーゼを引用してはいないものの、ヘルダーの役割の過大評価を戒めている。彼女は、「ヘルダーによるコメニウスの評価が、チェコ地域に影響を与えたのは19世紀になってからのこと」であるとする [BČB: 28]。また、ヘルダーが、「コメニウスを「われわれの民族の人間」と呼び、…コメニウスの著作をドイツ文化から育まれたと見なし、コメニウスをドイツ人とさえ見なした」として問題視し、ヘルダーの言及以前にパラツキーがコメニウスに関心をもっていたことを強調する [BČB: 28]。

ヘルダーによるコメニウスの評価をとりあげたチェコの知識人としては、言語学者のターム（Jan Šimon Václav Thám, 1765–1816）があげられる（1805年）。これに前後して、ペルツルのあとにカレル大学の言語学教授となったネイエドリー（Jan Nejedlý, 1776–1834）は、1801年にコメニウスのテキストをヴェレスラヴィーン（Daniel Adam z Veleslavína, 1546–1599）とともにチェコ語の模範として評価した。さらに、啓蒙主義者イエニク（Jan Jeník z Bratřic, 1756–1845）は、コメニウスの復興を願望し、カレル橋にコメニウスのモニュメントを設けようとした [BČB: 29]。このほか、チェコ語の復興という関心からコメニウスに言

及した存在として、カレル大学学長も務めたユングマン (Josef Jungmann, 1773–1847) の名をはずすことはできない。

チャプコヴァーによれば、19世紀初めまでのチェコ地域におけるコメニウスへの言及はチェコ語の復興という関心に基づいていたが、1829年にはライプニッツのコメニウスに対する関心がチェコの雑誌で紹介された [BČB: 30]。そしてこの時期に、コメニウス理解にブレークスルーをもたらしたのがパラツキーであった。パラツキーは、現在はチェコの1,000コルン紙幣の肖像にもなっている歴史家であり政治家であるが、兄弟教団の信徒の家系に生まれ、当時はハンガリーの支配下にあったスロヴァキアのブラチスラヴァで教育を受けた。1823年にプラハに移ってドロフスキーと親交を結び1825年に『チェコ博物館雑誌』 (*Časopis Českého musea*) の編集者となり、主著『ボヘミアとモラヴァにおけるチェコ国民の歴史』 (*Dějiny národu českého v Čechách a v Moravě*, 1836年ドイツ語版出版) の執筆にとりくんだ。パラツキーはプロテスタント信仰を維持したが、文化対立を招かないように穏健な姿勢をとった。しかし、カトリック側からは危険視され、そのテキストはしばしばライトを求められた。1848年2月革命後にプラハで開催されたスラヴ民族会議の議長となり、ウィーンの立憲議会にも選出され、さらにフランクフルト国民議会に向けた準備会議のメンバーにも選ばれたが、チェコ人の独立にとって好ましくないと判断し、招聘を辞退した。過激化する革命はオーストリアの介入を招き、それによってチェコでの立憲運動は一時中断するが、そのなかでもチェコの独立を志向した活動を続けた。

パラツキーは、チェコの宗教改革にカトリックとプロテスタントの教義の相互的な浸透を見出し、フス (Jan Hus, 1369–1415) やフス死後のフス派戦争の指導者ジシュカ (Jan Žižka, 1374–1424) らを再評価した。彼のコメニウスへの言及も、こうした流れに位置づけられる。チャプコヴァーは、パラツキーとコメニウスの間には民衆教育への配慮、母国語の重視、歴史著作の執筆、自由・寛容への希求等、多くの親和性を見出せると指摘する [BČB: 31]。このほか、ブラチスラヴァでの修学時に、教育学に関心を持ち、学問の最も重要な分野の一つと見なした点にも言及している。パラツキーのコメニウスへの関心は、ブラチスラヴァ時代にさかのぼられるという。1829年には、ドイツ語とチェコ語でコメニウスの生涯について執筆した (*Život J. A. Komenského. in: Časopis společnosti vlasteneckého Museum v Čechách*, R.3.)。パラツキーは、コメニウスの『教授学著作全集』に関心を払い、『言語の最新の方法』 (*Methodus Linguarum novissima*, 1649) についても哲学的、言語学的、教育学的重要性を20代初めには知っており、汎知学についても評価していた [BČB: 31]。この時代、コメニウスが長く滞在したポーランドのレシュノでコメニウス関係の文献がみつかったが、国立博物館に収蔵できるように運動したのもパラツキーであった [BČB: 32]。

1848年の革命後、改革の流れは停滞するが、チャプコヴァーがこの時代の論者として触れ





ブルキニェ

ているのが、著名な解剖学者、生理学者のブルキニェ（Jan Evangelista Purkyně, 1787-1869）である。彼は科学的で組織的な視点でコメニウスを再考するとともに、レシュノの草稿の入手にもとりくんだ。1632年に著されたものの生前には出版されなかった、チェコ語で著されたコメニウスの『教授学』（*Didaktika*）を1841年に発見したのも彼である。彼の貢献もあり、レシュノのコメニウス関連の文書も、1852年にチェコの博物館にもたらされた [BČB: 34-35]。彼は、コメニウスの『世界図絵』、『母親学校の指針』（*Informatorium školy mateřské*, 1632）といった作品にも注意を払った。民族再生運動の活動家で政治家でもあったアメルリング（Karel Slavoj Amerling, 1807-1884）は、受け入れられはしなかったものの、コメニウスに影響を受けた教育改革構想を提案した [BČB: 36]。アメルリングは『教授学』の出版にとりくみ、それは1849年に実現し、19世紀の後半には『教授学』は多くの教師によって読まれた [BČB: 36]。

さて、チャプコヴァーは、同時期のスロヴァキアにおけるコメニウスに関する盛んな言及を強調している。スロヴァキアには18世紀の半ばに啓蒙主義が浸透し、18世紀後半から19世紀前半はスロヴァキアの教育の黄金の世紀であったという [BČB: 38]。コメニウスへの言及も18世紀末にはすでに見られるという。なかでも、ドイツのイエナとエアランゲンで学んだリバイ（Jiří Ribay, 1754-1812）は、早い段階でコメニウスを知り、ドブロフスキーと交流をもった [BČB: 39]。この他にも多くの教育論が著されており、チャプコヴァーは、「この時代のスロヴァキアにおいて、コメニウスの刺激を受けて教育学が最高に自己発展したのは疑いがない」 [BČB: 40] とする。



コラル

なお、民族再生運動との関係でいえば、触れないわけにいかないのはスロヴァキアの詩人・言語学者・ルター派聖職者のコラル（Ján Kollár, 1793-1852）である。彼はウィーン大学教授を務めたが、ほとんどの作品をチェコ語で著した。チャプコヴァーは、「コラルの著作のなかでスロヴァキアのコメニウスの伝統は発展させられた」とする [BČB: 42]。コラルの立場は、啓蒙からロマン主義の伝統を人間主義と愛国主義に結合したものと見なされるという。民族再生運動のなかで、コメニウスへの関心が高まった要因として、チャプコヴァーは、ヘルダーによるコメニウスへの言及よりも、チェコの知識人と結びついたスロヴァキアの知識人の役割、そしてパラツキーの貢献を強調している [BČB: 46]。

1848年2月革命後、絶対王政が継続するなかで民族再生運動はさらに高まりを見せ、それ

にともなってコメニウスについても言及も一挙に増加する。1855年には、チェコの歴史家ギンデリー (Anton Gindely, 1829-1892) による『コメニウスの外国における生涯と業績』 (*Über des Johann Amos Comenius Leben und Wirksamkeit in der Fremde*) が、ウィーンの王立科学アカデミーから現れた。コメニウスの著作の翻訳と出版としては、『地上の迷宮と心の楽園』 (*Labyrint světa a ráj srdce*) が1892年までに6回、『死にゆく母なる兄弟教団への遺言』 (*Kšaft umírající matky, Jednoty bratrské*) が同じく4回刊行されている。また、『母親学校の指針』、『大教授学』 (*Didactica magna*, c.1639) が英語版、ドイツ語訳をはじめ、各国語に訳されて刊行された。『世界図絵』は1890年代以前に限っても8回も再版された [BČB: 50] ほか、『言語の最新の方法』が1882年、『遊戯学校』 (*Schola ludus*, 1656) の抄訳が1882年、『汎知学の先駆』 (*Prodromus Pansophiae*, 1639) が1879年、『民族の幸福』 (*Gentis felicitas*, 1659) が1884年、『開かれた事物の扉』 (*Janua rerum reserata*, 1681) が1886年、『光の道』 (*Via lucis*, 1641年筆, 1668年) が1888年、『パンエゲルシア』 (1702) が1888年、『パンアウギア』 (*Panaugia*, 1702) が1891年、『汎知学の意図の説明』 (*Conatum pansophicorum dilucidatio*, 1639) が1892年、『汎知学の二重描写』 (*Pansophiae diatyposis*, 1643) が1893年に現れた。



ゾウベク

これらの旺盛な翻訳活動をリードするとともにコメニウスの研究や普及を進めた人物として重要なのは、中等学校の教員で歴史家のゾウベク (František Jan Zoubek, 1832-1890) であった。彼は、『大教授学』のチェコ語訳の発刊にとりくむとともに、1871年にコメニウスについての最初のチェコ語のモノグラフ『コメニウスの生涯』 (*Život Jana Amosa Komenského*) を著した [BČB: 54]。チャプコヴァーによれば、ゾウベクはそのキャリアもあってかコメニウスの教育的側面を重視したほか、コメニウスの体系的な研究の端緒を開

いたという [BČB: 55]。

このほか、この時代にコメニウスにアプローチしたチェコの知識人としては、コメニウスの汎知学を社会と教育の改革の試みとしてとらえた作家で記者のシュトルフ (Karel Boleslav Štorch, 1812-1868)、コメニウスとライプニッツの関係を論じた哲学者・教育者のクヴィェト (František Boleslav Květ, 1825-1864)、先に触れたクラウゼのプラハでの支持者であるドイツ人哲学者レオンハルチ (Peter Carl Pius Gustav Hermann Freiherr von Leonhardi, 1809-187) らがあげられるという [BČB: 52-53]。

「近代教育学の祖」といった後代のコメニウス理解の原型となる解釈がもたらされたのもこの時代である。チャプコヴァーは、「教育理論家としてのコメニウスの伝統的な評価はドイツで発展させられたもの」とし、それを地質学者・教育者ラオマー (Karl Georg von Raumer,



ラオマー

1783–1865) とヘーゲル主義の哲学者シュミット (Karl Schmidt, 1819–1864) の二人に帰している [BČB: 53]。ラオマーは『教育学史』(*Geschichte der Pädagogik*, 1843–51) でコメニウスを教育学史上の重要人物としてとりあげ、シュミットの『教育学史』(*Geschichte der Pädagogik*, 1876–90) がそれに続いた。そして、ドイツのパッペンハイム (Eugen Pappenheim, 1831–1901) は『近代教育学の祖としてのコメニウス』(*Amos Comenius, der Begründer der neuen Paedagogik*, Berlin) をコメニウス没後200年の1871年に著した(当時は、コメニウスの没年は1671年と考えられていた)。ただ、この点についてチャプコヴァーは、コメニウスが多くの国々で受容された一方、そこには「コメニウスをドイツ人としてあつかうというショービニズム」が見られ、「そうした位置づけへの批判はチェコの民族主義的なブルジョアの意識の高まりのなかで批判」されるようになったと指摘している [BČB: 53]。

他方でチャプコヴァーは、兄弟教団の研究にとりくんだ神学者ミュラー (Joseph Theodor Müller, 1854–1946) や古典学者レーバー (Josef Reber, 1838–1924) といったドイツの研究者とチェコの研究者の間の協働関係が生まれた点も指摘している [BČB: 56]。さらに、ドイツの哲学者ディルタイ (Wilhelm Christian Ludwig Dilthey, 1833–1911) による『精神科学序説』(*Einleitung in die Geisteswissenschaften*, 1883) 第1巻でのコメニウスへの言及を、ヨーロッパ的文脈からの理解として重視している [BČB: 57]。ディルタイは、コメニウスの思想をルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712–1778) やペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746–1827) と比較して論じるという、教育思想史の古典的な記述のスタイルも提示した。ディルタイと同様のアプローチは、チェコでは医師で翻訳家・ジャーナリストのドゥルヂーク (Pavel Durdík, 1843–1903) によってなされた。

このほか、18世紀におけるドイツでのコメニウスに関する言及を見出したシュマハ (Josef Šmaha, 1843–1922) の研究もあるが、ゾウベクとともにこの時代のコメニウスへの言及を代表するといえるのが、リンドネル (Gustav Adolf Lindner, 1828–1887) である。カレル大学で法学から哲学に転じ、その後、スロヴェニアで教師をしていた彼は、コメニウスとともにルソー、エルヴェシウス (Claude-Adrien Helvetius, 1715–1771)、ヘルバルト (Johann Friedrich Herbart, 1776–1841)、スペンサー (Herbert Spencer, 1820–1903) を重視し、日本語を含む複数の言語に翻訳されたヘルバルト派教育学の教科書 (*Lehrbuch der nach empirischen*



リンドネル

*Psychology*, 1858等)を執筆した。そして、1871年にチェコに戻ってからは、クトナー・ホラの教員養成機関を指導し、最後にはカレル大学教授となった。

チャプコヴァーは、リンドネルにとくに紙幅を割いて、その影響を強調している。リンドネルは、1876年に『大教授学』のドイツ語訳に、その解説として「コメニウス、その人生と著作」(*Grosse Unterrichtslehre: Mit Einer Einleitung Comenius Sein Leben und Wirken*, Wien)を著した。この書は2度再版され、1878年にチェコ語版が出た。チャプコヴァーは、リンドネルが、教育者というより教育理論家としてコメニウスを見なしたとし、これは教育学の学問的確立という彼の意図と関連していたという。また、リンドネルの貢献として、①コメニウスを近代教育学の起点と見なすという解釈がチェコの国民教育の発展に刺激を与えたこと、②万人の道徳的な向上というコメニウスの主張を強調することでチェコ文化の卓越性を普及させたこと、③コメニウスを基盤とし、ルソー、ヘルバルト、エルヴェシウス、スペンサーらの思想を援用し、チェコの教育学の確立をめざしたこと(その際、ルソーとの比較において、教育における自然性についてのコメニウスの見解は批判的にとらえた)、④教育による社会の回復と結合をコメニウスの思想に基づいて主張し、教師の社会的地位の向上にも関わったこと、⑤コメニウスの評価に関わる幅広い論点を提示したこと、をあげている [BČB: 58-59]。

リンドネル以降、前出のドゥルヂークの兄にあたる大学教授のドゥルヂーク (Josef Durdik, 1837-1902)、ドゥルティナ (František Drtina, 1861-1925)、そしてマサリクらの哲学に造詣の深い大学教授がコメニウスを論じるようになった。ドゥルヂークは、近代哲学史の文脈でコメニウスを評価したほか、コメニウスの汎知学、千年王国論、神秘論についても研究した [BČB: 59]。



ブランディーシュ・ナド・オルリツィーのモニュメント

さて、チェコ社会でコメニウスが重要な存在として認められていく活動は、その他にも見られた。現在、チェコには多くのコメニウスに関するモニュメントがあるが、その最初のもは、1865年に作家と教員のイニシアティブでブランディーシュ・ナド・オルリツィーに造られた記念碑である [BČB: 48]。ここには、神聖ローマ皇帝軍の追跡のなかでコメニウスが身を隠し、『地上の迷宮と心の楽園』を著すのに用いたと伝えられる洞窟があり、記念碑はその脇に立っている。コメニウスの生地モラヴァで、重要な役割を果たしたのは、スラムニェニーク (František Slaměnik, 1845-1919) である。学校教師の彼は、モラヴァの教員の指



スラムニェニーク

導者でもあり、1873年には教育雑誌『コメニウス』(*Komenský*)を創刊し、1874年には、コメニウスがラテン語を学び、のちにそこで教師となったプシェロフにコメニウスのモニュメントを設置するのに関わり、1888年にはプシェロフのコメニウス教育博物館を創設し、コメニウス関係の資料を精力的に収集した [BČB: 69]。ちなみに、プラハのコメニウス博物館の創設は1892年、コメニウスの生地と考えられている南モラヴァのウヘルスキー・プロトの博物館は1898年に創設され、第二次世界大戦後、コメニウスの名を冠した。

コメニウスへの言及が増加し、社会的に認められていく過程でもうひとつ特徴的なのは、「記念年」が節目にされていったということである。その最初のとりくみは、コメニウス没後200年と考えられた1871年であった。この年の記念行事は、スロヴァキア、ボヘミア、モラヴァ、ハンガリーで行われたという [BČB: 62]。

この時期のスロヴァキアにおけるコメニウスについての言及に関して、チャプコヴァーは、とくにスロヴァキアの民族再生のなかで国民教育の実現がジャーナリズムでとりあげられ、コメニウスが繰り返し言及されたことを指摘している。もともと複雑な民族問題をかかえた神聖ローマ帝国では、ハンガリーの主張を受け入れる形で1867年に二重帝国が成立したが、スロヴァキアはハンガリーの強い影響下にあった。チャプコヴァーによれば、「その人間主義の精神が説かれた教育著作の諸目的を実現するうえで、コメニウスはチェコ人とスロヴァキア人を内面的につなぐ輪であったといえる」 [BČB: 61] という。

そして、実際にチェコとスロヴァキアにまたがり、とくに20世紀前半のコメニウス研究を主導したのが教育者で教会史家のクヴァチャラであった。彼は、とくにコメニウスの自然哲学についての研究で1886年にライプツィヒで学位を得た [BČB: 65]。

### 3. コメニウス生誕300年と二つの世界大戦

こうして、コメニウスに関する関心が高まりを見せるなかで、ひとつの頂点として築かれたのが、コメニウス生誕300年の1892年であった。ベチュコヴァーは、この時代、啓蒙主義の浸透によって、実証主義と現実主義に基づいた社会批判が民族再生運動の支柱になっていたとする。教師の社会的役割も高まり、教育関係の雑誌は10を超えた [BČB: 67]。コメニウスの誕生日の3月28日は月曜日であったが、この日を休業にという声を政府は認めず、相当の抵抗が起こったという [BČB: 67-68]。

主な行事は、3月26日から28日にプラハで開催されたが、3月26日土曜日には国民劇場で

式典が行われ、スメタナ (Bedřich Smetana, 1824–1884) やドヴォジャーク (Antonín Leopold Dvořák, 1841–1904) と並ぶチェコの国民楽派を代表する作曲家フィビフ (Zdeněk Fibich, 1850–1900) 作曲の「祝典序曲コメニウス」(作品34) が演奏され、詩人のスピーチなどがあった。翌日にも、当時は市民会館と呼ばれていたが、現在のルドルフィヌムでスメタナの曲などが演奏された。また、国立博物館では式典とともに展覧会が開会した。ここでの基調講演は先述のドゥルヂークが行った [BČB: 68]。ちなみに3月28日から5月18日までの博物館での展示には12,000人以上が訪れ、かなりの収益になったという [BČB: 70]。これらの行事で大きな役割を果たしたのは、リンドネルの弟子のクリカ (Josef Klika, 1857–1906) であった [BČB: 72]。

プラハ以外では、プシェロフで3日間にわたる行事が開催された。ここでの行事を主導したのはスラムニェニークである。コメニウスの生地と考えられているウヘルスキー・プロトにコメニウスのモニュメントが設置されたのもこの時のことであるが、そのモニュメントは、現在はやはりコメニウスの生地と考えられているニヴニツェにある。当時、ドイツでも教員たちの間でコメニウスへの関心が高まったが、スラムニェニークは、1891年にベルリンで開催されたコメニウス協会 (Comenius-Gesellschaft) の会合に参加したほか、コメニウスの墓所を訪ねてネーデルランドを訪れるなど積極的な活動を展開した [BČB: 69]。

コメニウス生誕300年の記念行事は、イギリス、アメリカ、ブルガリア、フィンランド、フランス、オランダ (チェコの代表団も参加してナールデンで開催)、クロアチア、ラウジッツ (現在のドイツ・ブランデンブルク州南部からザクセン州東部にかけての地域)、ドイツ、ポーランド、オーストリア、ロシア、セルビア、スウェーデン、ハンガリーでも開催された [BČB: 71]。



ニヴニツェのコメニウス像

また、チェコでは教育関係の出版協会「コメニウスの後継者」(Dědictví Komenského) が設立され、1951年まで存続したが、会員は1万人に達した [BČB: 70]。出版活動の基盤が確立されたことで、これ以降、コメニウスの著作の刊行はさらに盛んになった。ドイツで結成されたコメニウス協会は16か国から団体加盟を含めて1200名以上の会員を集め、ライプツィヒから月報を発刊した [BČB: 71]。

コメニウス生誕300年をめぐっては、国立博物館に収められた資料をもとに、歴史学者・言語学者のパテラ (Adolf Patera, 1836–1912) がコメニウスの書簡集 (*Jana Amosa Komenského Korrespondence*, 1891) を編纂したほか、歴史家のカプラス (Jan Kapras, 1880–1947) が当時の心理学・教



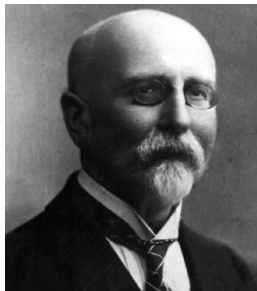
ヤン・ノヴァーク

育学との関連でコメニウスを考察した。また、高等学校の教授で言語学者、歴史家でもあったノヴァーク (Jan Václav Novák, 1853–1920) が多くの論文や翻訳にとりくんだ。彼の『コメニウス——その生涯と著作』(Jan Amos Komenský. Jeho život a spisy, 1920) は生前には完成しなかったものの、チェコ語で書かれたものとしては現在まで最も長大な伝記である [BČB: 73–74]。1891年11月、科学アカデミーの第三部門 (言語学) がコメニウスの研究にあたること が決定され、また研究者に基金が授与されるようになるなど、研究支援体制が整い始めたのもこの時期である [BČB: 76]。

さて、コメニウス生誕300年に前後して、コメニウス研究の基盤の確立に貢献した人物として無視することができないのが、クヴァチャラである。彼は、学位取得後はブラチスラヴァにいたが、その後はエストニアのタルトゥで教鞭をとった。1920年にチェコスロヴァキアに戻るが、ブラチスラヴァに新設されたコメニウス大学のポストには就かず、福音派神学校の教会史の教授を務めた [BČB: 78]。クヴァチャラは、1892年には、『コメニウス——その生涯と著作』(Johann Amos Comenius. Sein Leben und seine Schriften, Berlin-Leipzig-Wien) を出版したが、それはコメニウス生誕300年におけるもっとも重要な学術的貢献と見なされている [BČB: 77]。彼はまた、1897年から1902年にかけて科学アカデミーから刊行されたコメニウスの選集に関わった。その第一巻がパテラのものとともに現在でも重要な史料として用いられている『コメニウス書簡集』(Korrespondence J. A. Komenského, Praha, 1898.) である [BČB: 76]。このほか彼は、『17世紀末までのドイツでのコメニウスによる教育改革』(Die pädagogische Reform des Comenius in Deutschland bis zum Ausgange des XVII Jahrhunderts, Berlin, 1903) といった著作や書簡集等に収録されなかったコメニウス文献を収めた『アナレクタ・コメニアナ』(Analecta Comeniana, Jurjev, 1909) の編纂を行った [BČB: 78]。コメニウスの教育的営為に焦点を当てた彼による短い伝記『コメニウス』(J. A. Comenius, Berlin, 1914) は、チェコ語やスロヴァキア語の版を含めて何度か再刊された。



ヘンドリヒ

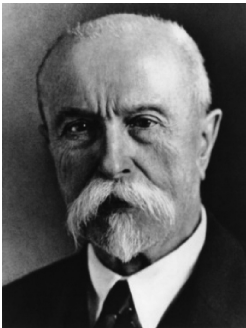


ソウチェク

しかし、クヴァチャラによるコメニウス研究への貢献としてもっとも重要なのは、『コメニウス全集』(Veškeré spisy J. A. Komenského) とコメニウス研究誌『コメニウスの生涯と著作についての研究のための記録』(Archiv pro badání o životě a spisech J. A. Komenského) の編纂と出版であろう。15年で30巻にわたる全集を出

版しようという壮大な計画は、モラヴァの教師たちの支持によって開始された。全集は 8 部構成が予定され、1910年に出版がスタートし、1914年には 5 巻目までが出たが、第一次世界大戦の勃発により出版は滞り、1938年に第 4 部の 2 巻が出たところで途絶えた [BČB: 80-81]。この編纂には、すでに名前の挙がっているノヴァークやレーバーも関わり、戦間期には、のちにカレル大学で学部長も務めた教育学者のヘンドリヒ (Josef Hendrich, 1888-1950) や歴史学者・言語学者でマサリク大学学長を務めるソウチェク (Stanislav Souček, 1870-1935) らが参画し、コメニウス研究者の流れが作られた。また、クヴァチャラによって創刊されたコメニウスの研究雑誌は、コメニウス研究の拡充の場を提供したが、1940年に第15巻が発行されたところで途絶えた。

ベチュコヴァーは、チェコスロヴァキアが成立する1918年までの時期には顕著な論文が見出せないとしながらも、前出のカレル大学教授のドゥルティナが教育学ゼミナールを開講したことや同じカレル大学で教育学を担当したカードネル (Otokar Kádner, 1870-1936) が教育学史で積極的にコメニウスをあつかったことに言及している。また、スラムニェニークのあとを受けるかたちで教師の代表として発言したのが、プシエロフのコメニウス博物館の館長を引き継いだクルンプホルツ (Josef Krumpholtz, 1870-1950) であった [BČB: 84]。



マサリク

第一次世界大戦の休戦協定が結ばれる 2 週間ほど前の1918年10月28日、チェコスロヴァキアの独立をめざす国民委員会が独立を宣言し、プラハの政庁を占拠した。そして、チェコスロヴァキアは、哲人政治家マサリクの指導のもと歩んでいくことになった。チェコスロヴァキアの独立は、コメニウスが『死にゆく母なる兄弟教団への遺言』のなかで記したチェコ人による統治の回復という願望の実現としてとらえられた。共和国憲法が制定され、チェコスロヴァキア第一共和国が成立した1920年はコメニウスの没後 250年にあたっていた。マサリクはコメニウスの人間主義の概念を擁護し、演説や論文でコメニウスに言及した。コメニウスが三十年戦争のなかでポーランドに亡命した1628年から300年にあたる1928年には、マサリクの序文とコメニウスの著作からなる英文の『コメニウス』 (*J. A. Comenius*) が発刊された [BČB: 89]。

1920年代にはコメニウス著作の出版が再び行われるようになるが、経済危機とファシズムの脅威のなかで、1930年代になると明らかにコメニウスの著作の出版が減少したとベチュコヴァーは述べている [BČB: 88, 91]。戦間期におけるコメニウス研究は、何といたってもコメニウスをめぐる文献の発見によって特徴づけられる。まず、1931年、前出のソウチェクがロシアのサンクトペテルブルク (当時はソ連のレニングラード) の公立図書館でラテン語とチェコ語で書かれたコメニウスの形而上学や自伝的記録に関する文献を発見した [BČB: 92]。ま



た、イギリス・シェフィールド大学の教育学教授ターンブル（George Henry Turnbull, 1899–1961）が、コメニウスの協働者で17世紀ヨーロッパの知識人の文通を仲介したハートリブ（Samuel Hartlib, 1600–1662）の残した膨大な書簡等を1933年に発見した。



チジェフスキー

さらに、1934年にウクライナ生まれの言語学者チジェフスキー（Dmytro Ivanovich Chyzhevsky; Dmitri Tschizewsky; Dmitrij Tschizewskij, 1894–1977）が、ドイツ・ザクセン地方のハレにありフランケが設立した孤児院の文書館で、行方不明になっていた『総合的熟議』の草稿を発見した。これらの発見によって、コメニウス研究の論点はそれまでとかなりの異なりを見せるようになった。なお、『総合的熟議』の草稿は、第二次世界大戦末期におそらく旧ソ連の手によってハレから持ち出され、プラハにもたらされた。戦後、この草稿をチェコスロヴァキアが保有することを旧東ドイツ政府が合法として認め、この草稿はプラハの国立図書館に所蔵されている。チジェフスキーは、この草稿をタイプライターでトランスクリプトし、ドイツ側にはそのコピーが残され、草稿に基づいた研究が進められた。



ナールデンのコメニウスの墓碑

この頃コメニウスは、チェコスロヴァキアという国民国家の歴史的アイデンティティの象徴と見なされるようになっていたが、これに関連した重要な出来事が、ネーデルランドのナールデンにあるコメニウスの墓所の整備である。コメニウスは1670年11月に死去し、ナールデンのワロン派教会に埋葬されたが、その管理・保存の状態は劣悪であった。1927年、人類学者でカレル大学学長も務めたマチエグカ（Jindřich Matiegka, 1862–1941）が現地調査を行い、チェコスロヴァキア政府は、ネーデルランド政府から名目的な賃貸料年間1ギルダーで教会の永代使用权を得て、墓所の整備が進められた。1937年5月8日に記念式典が開催され、ナールデンはチェコ人の巡礼地となった [BČB: 95–96]。

戦間期から第二次世界大戦に向かう時期のチェコにおけるコメニウス研究としてベチュコヴァーがあげているのは、先述のヘンドリヒのほか、教育学者クリーマ（Jiří Václav Klíma, 1874–1948）、カレル大学教授でフス派の研究者オトロジリーク（Otakar Odložilík, 1899–1973）によるものである [BČB: 92–93]。クリーマは、多くの講演や論考でコメニウスの一般的関心を高めた。オトロジリークは第二次世界戦期から活動の場をアメリカに移した。第二次世界大戦中は、困難な時期にもかかわらず、『地上の迷宮と心の楽園』や『母親学校の

指針』が再刊されていた。また、1939年には、生物学者・哲学者でマサリクの支持者として知られるラードゥル (Emanuel Rádl, 1873-1942) が、「コメニウスにおける学問と信仰」(*Věda a víra u J. A. Komenského*) を発表し、教育や政治に関する論考を多く著したチャペック (Emanuel Čapek, 1880-1960) の『教育者としてのコメニウス』(*Comenius als Erzieher*) が1942年にドイツ語で出版された [BČB: 97]。

チェコにおけるコメニウスへの言及にあたって「記念年」が重要な節目とされてきたことはすでに触れたが、生誕350年にあたる1942年は、チェコがベーメン・メーレン保護領としてナチス・ドイツの統治下におかれた時期であり、事実上の支配者のハイドリヒ (Reinhard Tristan Eugen Heydrich, 1904-1942) の暗殺が実行され、チェコではその反動による粛清の嵐が吹き荒れた。そうしたなかでも、コメニウスを題材とした大衆的な作品のコンテストが行われ、ヘンドリヒがその受賞者となった。また、このコンテストに関連して、哲学者のパトチカ (Jan Patočka, 1907-1977) が、最初のコメニウス論を執筆した [BČB: 98-99]。

第二次世界大戦後の間もない時期、『死にゆく母なる兄弟教団への遺言』といった愛国的なテキストや『地上の迷宮と心の楽園』、『母親学校の指針』などが再刊された。専門的な研究として特筆されるのは、ハートリブ文書を発見したイギリスのターンプルが、ハートリブ文書を詳細に研究した『ハートリブ、デュアリ、コメニウス——ハートリブ文書からの収穫』(*Hartlib, Dury and Comenius. Gleanings from Hartlib's Papers*, Liverpool, 1947) を発刊したことである。また、彼がハートリブ文書から発見したコメニウス文献が、1951年にプラハから発刊された (*Dva spisy vševedné, Praha*)。さらに、ヘンドリヒによって『総合的熟議』の第4部『パンパイディア』(汎教育, *Pampaedia*) と第6部『パンオルトシア』(汎改革, *Panorthosia*) のチェコ語訳が、それぞれ1948年と1950年になされた。ヘンドリヒはこうした研究を通してコメニウスを教育者よりも汎知学者として評価するようになったという [BČB: 102-103]。

#### 4. 冷戦と二つの記念年

1950年代前半を特徴づけるのは、チェコスロヴァキアにおける研究体制の確立である。1954年、チェコスロヴァキア科学アカデミーに教育学研究部門 (Kabinet pedagogických věd Československé akademie věd) が設置され、1956年3月、共産党と政府の決定により、コメニウスの著作の収集と翻訳を含めた発行にとりくむこととなり、その翌年にはチェコスロヴァキア科学アカデミー J. A. コメニウス教育学研究所 (Pedagogický ústav J. A. Komenského ČSAV) に改組された [BČB: 105-106]。冷戦下においては表だって言及されなかったが、オルシャーコヴァーは、ベチュコヴァーによる次のような回想を引いている。

「実際、簡潔に言えば、1953年のゴンチャロフ教授（Nikolai K. Gontcharow, 1902–1978）に率いられたソ連の代表団があった際、マカレンコ（Anton Semyonovich Makarenko, 1888–1939）等も含めてすべてを扱っていた教育学研究所にも訪問した。そこで代表団は、コメニウスの研究部門もあるのかを尋ねたが、1945年からブランボラ博士（Josef Brambora, 1923–1978）がそこに勤務し、コメニウス研究にあたっているにもかかわらず、コメニウス研究部門が存在しないことに気づいた。そして、この訪問団の来訪のあと、教育学図書館がコメニウス部門を設けた。それは1954年10月1日に開設され、チャプコヴァー博士が運営したが、その後、彼女がアカデミーに移ることになった1956年に私が引き継いだ。」[DO: 19–20, 人名の欧文表記と生没年を引用者が付加]

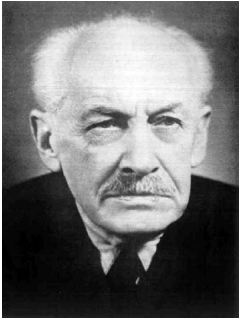


アルト

ゴンチャロフは旧ソ連の教育界で指導的立場にあった教育学者で、のちにチェコスロヴァキアを訪れた際、「偉大な人間主義者コメニウス」(*The Great Humanist John Amos Comenius*)と題した英語の講演を行っている。ベチュコヴァーの回想に関してオルシャーコヴァーは、「チェコ史上の主要で進歩的な群像のパンテオンにコメニウスを含めることについて、戦後チェコの歴史学における彼の位置が何であれ、外的な環境からの刺激がまさに決定的であったように思われる」[DO: 20]と記している。実際、この時期にマルクス主義の立場からコメニウスの生涯と著作を紹介する著作が東ドイツとソ連で現れ、大きな影響を及ぼしていく。それらはともに1953年に出版された、ソ連の教育学者クラスノフスキー（Arkhip Alekseevich Krasnovsky, 1885–1953）による『コメニウス』(*Ян Амос Коменский*)と東ドイツの教育学者・政治家アルト（Robert Alt, 1905–1978）による『コメニウス教育学の進歩的性格』(*Der fortschrittliche Charakter der Pädagogik Komenskys*, Berlin)である。両書は、1955年にはチェコ語訳が出版された [BČB: 105]。

コメニウス文献の出版は、国立教育出版所（Státní Pedagogické Nakladatelství）のもとで、ブランボラ、コペツキー（Jaromír Kopecký, 1914–）、パトチカからの編纂によって進められ、のちにキラージュク（Jiří Kyrášek, 1929–1978）、ポペロヴァー＝オターハロヴァー（Jiřina Popelová-Otáhalová, 1904–1985）が加わった。コペツキー、パトチカ、キラージュクによる『コメニウス——その生涯と著作の概要』(*Jan Amos Komenský. Nástin života a díla*)は、英語でも出版された。このほか、ベチュコヴァーのあげるところでは、チェコスロヴァキアでは、スロヴァキア語によるコメニウス文献の出版がなされたほか、とくにラテン・アメリカ史関係で多大の業績を残した歴史学者のポリシェンスキー（Josef Polišenský, 1915–2001）がコメニウスの平和論について編纂した『平和の使徒コメニウス』(*Apoštol míru J. A. Komenský,*

Praha, 1949) が出た。彼は、1957年、1967年の国際会議の事務局長、1970年の国際会議では議長を務めた [BČB: 115]。このほかヘンドリヒによる『コメニアナ』(Comeniana, 1951)、さらにコメニウス著作をアルファベット順に紹介したブランボラの『コメニウス著作の書』(Knižní dílo J. A. Komenského, 1954) など [BČB: 103-104] がこの時期の業績としてあげられる。



ネイエドリー

どの程度、実際のコメニウス研究に影響を与えたかは、立ち入った分析が必要だが、冷戦下のチェコスロヴァキアの文化政策において、コメニウス研究に求められた方向性をうかがわせる言及がある。それは、戦前、音楽学者としてスメタナとドヴォジャークのいずれがチェコ国民楽派の音楽として正当であるかといった議論を主導したネイエドリー (Zdeněk Nejedlý, 1878-1962) によるものである。戦前から共産党に加わっていた彼は、戦中は旧ソ連にあり、戦後、チェコスロヴァキアに帰国すると、教育文化大臣等を務めた。彼は、学校カリキュラム等の確立に力を注ぐ一方、多くの学者や芸術家の追放にもかかわったことで知られる。チェコフィルハーモニー管弦楽団を一流の楽団に育て上げた指揮者のタリフ (Václav Talich, 1883-1961) も彼に遠ざけられた一人である。1954年に出版された『共産主義者——チェコ国民の偉大な伝統の継承者』(Komunisté — dědici velikých tradic českého národa) では、以下のような論が展開されている。

「いかに真に人民が状況を認識するようにわれわれが考慮するべきであるならば、チェコ兄弟教団のうちにある者が、フスあるいはジシュカといったわが民族の伝統的な英雄たちの序列に属さないということに驚くべきではない。そう、偉大なコメニウスですらもそうである。…チェコ兄弟教団は、フスやジシュカのように革命的では決してなかった。…なるがゆえに、フスやジシュカはその人民の記憶に生き続けたのだが、ヘルチツキー (Petr Chelčický, 1390?-1460?) やコメニウスはそうではなかった。」<sup>3)</sup> [引用者が人名の欧文表記と生没年を付加]

ヘルチツキーは、チェコ兄弟教団の教義を確立した修道士として知られ、原始キリスト教への回帰を志向し、フス派戦争のような暴力的な手段を批判した。ここでネイエドリーが、革命的か進歩的かという観点から、チェコ史上の群像を評価しようとしたことは明らかだ。現在、プラハ市街を見下ろす丘には、人物の銅像としてはヨーロッパで最大というジシュカの騎馬像が据えられているが、これは共産主義時代に建立されたものである。こうしたチェコ史の方向づけにあって、コメニウスは、その「諸国民の教師」という評価が、すでに国際的にも受け入れられていたものの、チェコ兄弟教団の監督という宗教的・平和的な属性はネガティブに評価された。オルシャーコヴァーは、「共産主義体制がその「輸出品」のうちで

コメニウスをいかにどの程度まで変容させられるかが、さらなる詳細な研究に向けた問題、むしろ課題となったのだ」[DO: 19]と総括している。

『教授学著作全集』の発刊から300年にあたる1957年は、こうした状況の中で到来した。ベチコヴァーが別稿で触れているが、この年の諸行事はユネスコとの連携のもとで進められた面が大きかった。前年、インドのニューデリーで行われたユネスコの会議で、1957年をコメニウス年とすることが決定されている。コメニウス著作の抜粋から構成され、英語やフランス語に翻訳された論集『コメニウスの教育論』(John Amos Comenius on education, New York: Teachers College Press, 1957.)の巻頭論文は、当時、ユネスコの国際教育局長を務めていた著名な心理学者のピアジェ (Jean Piaget, 1896-1980) が執筆した [BČB: 109]。



ウヘルスキー・プロトのコメニウス像

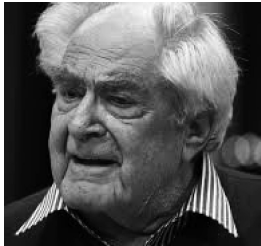
この年の記念行事は、1892年以来の規模となった。まず、『教授学著作全集』の復刻出版がなされた。そして、20年近い休刊をはさんで『コメニウスの生涯と著作についての研究のための記録』が復刊され、「アクタ・コメニアナ」という副題がついた。同誌は1963年までは1年間に2号のペースで出版された。1970年までこの編集を務めたのはブランボラであった。国際会議は、9月にプラハでチェコスロヴァキア科学アカデミーとユネスコの共催で21か国からの参加者を得て開催された。記念行事は、チェコスロヴァキアの各地で行われたほか、スウェーデン、ポーランド、旧ソ連、旧東ドイツ、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニア、ネーデルランドでも開催された。ウヘルスキー・プロトのコメニウス博物館前とコメニウスが埋葬されているネーデルランドのナールデンに立つコメニ

ウスのモニュメントが除幕されたのもこの時である [BČB: 107]。ベチコヴァーはあげていないが、日本でも1958年4月に広島大学で記念行事が開催されている<sup>4)</sup>。国際会議では、研究の国際化が重視され、『総合的熟議』の出版をめざすことが確認された。

これと前後して、コメニウスの選集あるいは全集、そして各国語の選集や論文集が相次いで出版されていく。1958年には、教育学研究所による8巻の『コメニウス選集』(Výbrané spisy Jana Amose Komenského)の出版計画が開始され、こちらは1978年に完結した。1964年には、英語とフランス語の選集 (English: *J. A. Comenius, Selections from his Work*; French: *Recueil d*

*extraits de l'oeuvre J. A. Komenský*) がキラージェクの編集で11月17日大学から出版された<sup>5)</sup>。また、1959年には、コメニウスの生前に何度も改訂された『開かれた言語の扉』をチェルヴェンカ (Jaromír Červenka, 1903–1983) が比較考証して出版している (*Johannis A. Comenii Janua linguarum reserata*)。また、新たに発見されたコメニウス関係の書簡の編纂もなされた [BČB: 108–109]。

この時期前後からチェコスロヴァキア以外でコメニウス研究を活発に展開した人物として外すことができないのが、西ドイツ (当時) のシャラー (Klaus Schaller, 1925–2015) である。彼は、戦後、1957年のプラハでの記念行事に参加し、チェコスロヴァキアの研究者と親交を結び、1960年には、チジェフスキーの編集のもとに『パンバイディア』のラテン語ドイツ語対訳版を刊行した。その後、1965年には新設のルール大学 (ポーフム) 教授となり、1970年にはコメニウス研究センター (Comenius-Forschungsstelle) を設立して、コメニウスのテキストの原典やその翻訳、および研究論文の発行を精力的に進めた。この間、『コメニウスの教育学と17世紀における教育学的リアリズムの誕生』 (*Die Pädagogik des Johann Amos Comenius und die Anfänge des pädagogischen Realismus im 17. Jahrhundert*, Heidelberg, 1967) を著している。



1957年以降のコメニウス研究のひとつの頂点は、1966年、チェコスロヴァキア科学アカデミー教育学研究所から、『総合的熟議』が『教授学著作全集』と同様の版型の大判の2巻本として出版されたことであった。また、27巻60冊に及ぶ『コメニウス著作全集』 (*J. A. Comenii Opera Omnia*) の出版が計画された。編集事務局は1959年に科学アカデミーチェコ語研究所におかれ、事務局は1969年には独立した部門となったが、1971年に教育学研究所に吸収された。第1巻は1969年に発行された。編纂にあたったのは、シュカルカ (Antonín Škarka, 1906–1972)、コペツキー (前出のコペツキーとは別人, Milan Kopecký, 1925–2006)、ノヴァークヴァー (Julie Nováková, 1909–1991)、スタイナー (Martin Steiner, 1946–)、クラリーク (Stanislav Králík, 1909–1987)、ペトラーチュコヴァー (Věra Petráčková, 1941–1998)、キラロヴァー (Marie Kyrálová, 1937–) らである。『コメニウス著作全集』は、コメニウス生誕400年の1992年までに14巻が出版された [BČB: 110–111]。

『総合的熟議』の編纂が進むなかでコメニウスの教育理論の哲学的基礎が注目され、『総合的熟議』の出版をうけて、1967年9月にはオロモウツで国際会議が開催された。クヴァチャラが創刊したコメニウス研究誌が、1957年に再興した際に副題として付されたアクタ・コメニウスが誌名となることが決まったのは、この会議の席上であった。そして、1970年9月にコメニウスの没後300年を記念する国際会議が開催された。ここでは、コメニウス研究の方向



1970年のプラハでの国際会議

性が、哲学的・教育学的、歴史的、言語学的といった3つのアプローチでとらえられた。この年にはブシェロフでも大きな会議が開催され、各国でも会議が持たれた [BČB: 124]。

およそ1970年までチェコスロヴァキアにおけるコメニウス研究には、いくつかの流れが見出される。まず、共産主義体制のもとで、主としてマルクス主義の視点から



ポペロヴァー

の経済・社会的関係に立脚した研究が多く現れた。その代表格にあげられるのが、ポペロヴァー-オターハロヴァーであろう。彼女は、1958年の著書『コメニウスにおける汎改革への道』(*Jana Amosa Komenského cesta k všenápravě*)で、コメニウスの社会観を解説し、歴史的唯物論の方法に基づき、歴史と文化概念の弁証法というシマに立った研究を多く著した。他方で、彼女の研究にはチェコの国民性の考察にも向けられるなど、愛国主義的な傾向も見出される [BČB: 113-114]。『大教授学』をラテン語原典から

邦訳した鈴木秀勇（1921-2011、のちに琇雄と改名）は、1963年にプラハに一年滞在して研究を進めているが、帰国後の彼の論考には、ポペロヴァーらへの批判的な言及が見られる。それは、当時のチェコスロヴァキアにおいて基調であった唯物論的な解釈が不十分であるという主張であった<sup>6)</sup>。

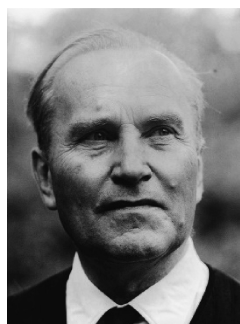


チャブコヴァー

この時期には専門的な研究体制が確立されたことで、手堅い実証主義的な研究も積み重ねられていった。とくに、教育学研究所が研究センターとなったことで、教育学視点からの研究が進展した。ベチュコヴァーは、コメニウスの類比の方法を論究したキラージュクの業績『コメニウス著作における類比の方法』(*Synkritická metoda v díle J. A. Komenského*, 1964)に注目している [BČB: 115-116]。また、チャブコヴァーは、『コメニウスの著作における

就学前教育——その先駆者と後継者』(*Předškolní výchova v díle J. A. Komenského, jeho předchůdců a pokračovatelů*)を1968年に著し、コメニウスの教育論の全体的な考察を行った<sup>7)</sup>。チャブコヴァーは、ハートリブとコメニウスの関係を重視し、関連の文献を出版するなど、

純歴史的な研究に貢献した一方、彼女のコメニウス解釈には、コメニウスの汎知学と教授学の間には弁証法的関係を見ようとする傾向もあった [BČB: 116]。



パトチカ

これらの研究とやや隔たったところで、二つの記念年をはさむ時代のコメニウス研究で重要な役割を果たしたのがパトチカであった。彼は設立間もない教育学研究所に所属し、コメニウス著作の編纂に関わるとともに、多くのコメニウス論を著した。彼は、コメニウスとクザヌス (Nicolaus Cusanus, 1401-1464)、ベーコン (Francis Bacon, 1561-1626)、カンパネッラ (Tommaso Campanella, 1568-1639) との関係論を論じるなど、主として思想史のアプローチをとった。その著書『アリストテレス、その先人と後継者』(*Aristoteles, jeho předchůdci a dědicové*, Praha, 1964) の第二部はコメニウスにあてられている。ただし、パトチカのコメニウス研究はその後期に変貌を遂げていき、単なる思想史研究という枠には収まらないものになっていく [BČB: 113]<sup>8)</sup>。

1970年前後には、このほか多くの個性的な研究が現れている。スロヴァキアのカルシャイ (František Karšai, 1918-1975) は、コメニウスもシャーロシユパタクへの旅の際に立ち寄ったプレシヨフで研究を進め、『コメニウスとスロヴァキア』(*Jan Amos Komenský a Slovensko*, Bratislava, 1970) を出版し、スロヴァキアにおけるコメニウス受容に関して包括的にとりあげた [BČB: 118]。このほか、ポリシェンスキーとネーデルランドの歴史学者モウト (M.E.H.N. (Nicolette) Mout, 1945-) が協働し『アムステルダムのコメニウス』(*Komenský v Amsterodamu*) を、また、チェルヴェンカが『コメニウスの自然哲学』(*Die Naturphilosophie des Johann Amos Comenius*, Praha, Hanau) を発表した [BČB: 115, 120]。1960年代の半ばから、コメニウスの自然観や宇宙論に関する論文を発表していたフロスによる『コメニウス——事物の劇場から人間のドラマへ——』(*Jan Amos Komenský, Od divadla věci k dramatu člověka*, Ostrava) が出たのもこの年である [BČB: 117]。また、ベチュコヴァーは、カレル大学のチャベック (前出のチャベックとは別人, Jan Blahoslav Čapek, 1903-1982) が心理学的視点から興味深い短編を著したことに触れている [BČB: 122-123]。

ベチュコヴァーは触れていないが、1970年周辺には、チェコスロヴァキア以外でもコメニウス研究で重要な貢献が現れた。プラハに生まれ、ノルウェーにわたったブレカシユタット (Milada Blekastad, 1917-2003) は、オスロ大学でチェコ語を教えるかたわらコメニウス研究を進め、1969年に『コメニウス——その生涯・著作・運命についての概括の試み——』(*Comenius, Versuch eines Umrisses von Leben, Werk und Schicksal des Jan Amos Komenský*) で学位を取得した。これは現在に至るまでコメニウスのもっとも詳細な伝記的研究である。イギリスの科学史家ウェブスター (Charles Webster, 1936-) は、ハートリブ文書の研究に立脚



し、『サミュエル・ハートリブと学問の進歩』(*Samuel Hartlib and the Advancement of Learning*, Cambridge, 1972), 少し遅れて『大革新』(*The Great Instauration*, 1975, 2nd ed., 2002)を著している。ネーデルランドのルード (Wilhelmus Rood, 1925–1993) は、『コメニウスとネーデルランド——17世紀亡命チェコ人の生涯と業績の側面——』(*Comenius and the Low Countries. Some aspects of life and work of a Czech exile in the seventeenth century*, Praha, 1971)で、ネーデルランドにおけるコメニウスの足跡を論じた。日本でも、堀内守 (1932–2013) による『コメニウス研究』(福村出版, 1970年)が現れた。堀内は、1972年から73年にかけてプラハに研究滞在している<sup>9)</sup>。

## 5. 生誕400年をはさんだ変化

1970年代に入り、『コメニウス著作全集』の刊行は継続され、ノヴァークヴァーの編集によって、コメニウス最晩年の手稿『エリアの叫び』(*Clamores Eliae*)が第23巻に収められるなど、研究の基盤となるテキストの研究は進められていった。他方ベチコヴァーは、コメニウス没後300年の記念年を境に、コメニウス関係の論文数が数字上はやや減少し、そこには世代交代の影響や国際交流の停滞があったとしている [BČB: 126]。



プシェロフのコメニウス博物館前の  
ブラホスラフ像

この点はベチコヴァーによっては言及されていないが、プラハの春の挫折以降の正常化政策が影を落としていたことは明らかであり、それを解明したのがオルシャーコヴァーの研究である。正常化時代、プラハの科学アカデミー傘下の研究所が強いイデオロギー的統制下におかれるなか、いくつかの地方の博物館が、体制から排除された研究者も集うことのできる知的な空間を提供した。そのひとつが、ウヘルスキー・プロトのコメニウス博物館であった。それを主導したのがフロスである。彼は、コメニウスの自然観や宇宙論の研究にとりくむ一方、弟のカレルとともに、自宅アパートを提供したセミナーをはじめ、1968年にプシェロフでコロキウムを組織した。そして、1970年代からウヘルスキー・プロトのコメニウス博物館でコメニウス研究部門のリーダーとなり、1974年から76年にかけては所長を務めた。1971年から、同博物館でコメニウス・コロキウムを開催し、博物館発行の『コメニウスと歴史の研究』(*Studia Comeniana et historica*)はコメニウス研究の発表の場として重要な役割を果たした [BČB: 117]。1971年のコロキウムのテーマは「コメニウスの先駆者ヤン・



1971年のウヘルスキー・プロトでのコロキウム（左フロス，中央ボリシェンスキー）

ブラホスラフ」であった。ブラホスラフ（Jan Blahoslav, 1523–1571）は、コメニウスが学校教育を受け、のちにそこで教師となるブシェロフに生まれ、ドイツ地域の宗教改革にも広く学んで、チェコ兄弟教団の監督となり、新約聖書のチェコ語訳にとりくんだほか、チェコ語の文法研究にも貢献した。先に、フスやジシュカに革命的・進歩的な

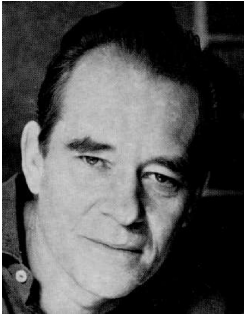
性格を見出し、チェコ兄弟教団の温和な傾向性を批判したネイエドリーの見解を見たが、ブラホスラフをとりあげることは、当時において体制側に挑戦的と受けとられたことは想像に難くない。ちなみにフロスは、1972年9月6日から1981年6月15日まで秘密警察（チェコスロヴァキア国家保安庁 StB）にスパイ容疑者として見張られていた [DO: 38]<sup>10)</sup>。また、プラハの教育学研究所の所長は、研究所員にウヘルスキー・プロトでのコロキウムに出席を禁ずることもあった [DO: 41]。フロスは、当時の取り組みを次のように回想している。

「ウヘルスキー・プロトのコロキウムでは、トピックも幅広く、コメニウスの予言といった特殊なテーマにもしばしば関心が払われた。…正常化のイデオロギーは、宗教一般、およびとりわけキリスト教的な精神性の形態をとったものに対しては何であれ、攻撃を強化するということを明言した。…当時のイデオロギーのなかには、キリスト者との対話、そしてキリスト者とマルクス主義者との対話の積極的な実りを隠ぺいしようとする者がいた。…私の弟とともにとりくんだのは、60年代終わりからの正常化政策による窒息させられるような雰囲気なかで、対話の精神から与えられる可能性を育てるということだった。」 [PF: 313–314]

他方、1970年代から80年代にかけては、マルクス主義的なイデオロギー分析に基づく研究が引き続き行われた。たとえば、ポペロヴァー–オターハロヴァーは、以前からコメニウスの三元論をとりあげていたが [BČB: 114]、1980年代にも歴史と文化概念の弁証法という観点から研究を公にした [BČB: 127]。それらは、1986年にブラチスラヴァから『コメニウスの哲学』（*Filozofia Jana Amosa Komenského*）として出版された。フロスの回想は、当時の研究者間にいかに厳しい意見の対立があったかを伝えている。

「イジナ・ポペロヴァーは、コメニウスの三相法を愚かで無意味な熱狂であると見なし、コメニウス学者がコメニウスの三相法に関心を持つのを打ち砕こうとした。それは、コメニウスの三相法をとりあげることが、コメニウス学者、歴史家、哲学者を導き、ヨーロッパの三

相的なる思弁の歴史に関する哲学者の深い研究につながり、弁証法的で歴史的な唯物論のイデオロギー的な源泉がとりわけキリスト教的な新プラトン主義の神学的な三元論の思弁にあることを今一度明らかにするということへの懸念から発したものだ。」[PF: 314]



カリヴォダ

忘れずに記しておかなければならないのは、こうした対立は単純に体制と反体制の相克とは見なせないということである。ポペロヴァーは、明らかに体制寄りの研究者であったが、プラハの春後の共産党の方針を受け入れられず、党除名を経てカレル大学を辞職に追い込まれている。また、フス派の研究者でマルクス主義哲学者のカリヴォダ (Robert Kalivoda, 1923–1989) は、コメニウスがフスによる革命によって創造された文化をイデオロギー的に頂点に導いたと理解し、その文脈で至福千年説やユートピア論の革命的インパクトを強調し、コメニウス関連の著書としては、『フス派の時代とコメニウス』 (*Husitská epocha a J. A. Komenský, Praha, 1992*) がある [BČB: 127]。彼は哲学研究所の研究員を長く務め、1970年に教育学研究所に移るが、政治的理由から1974年に早期退職している。長年、コメニウス研究のスポークスマン的な役割を果たしたポリシェンスキーも共産党を離れたほか、人事等の不遇を受けた者は少なからずおり、正常化体制下のコメニウス研究は相当に困難な状況におかれていたことが見てとられる。

1950年代から60年代にかけてチェコスロヴァキアのコメニウス研究に独自の足跡を残したパトチカは、1968年にカレル大学教授となるが、1972年に教職を解かれ、論文の出版等も禁じられてしまう。彼は、1950年代からドイツのシャラーと親交を結んでいたが、シャラーはパトチカに総括的なコメニウス論の執筆を促した<sup>11)</sup>。そして現れたのが、「コメニウスと開けた魂」 (*Comenius und die offene Seele, 1970*) および『コメニウスの教育の哲学』 (*Die Philosophie der Erziehung des J. A. Comenius, Paderborn, 1971*) である。前者についてはチェコ語訳も出版され、後者については並行してチェコ語論文も書かれたが、実存主義的なコメニウス解釈は、チェコ語論文には記されず、双方のテキストにはかなりの隔りがある。カレル大学を離れた後、パトチカは、プラハやブルノでひそかに行なわれていた地下大学で自らの哲学を講じた。そして、のちに大統領となるハヴェル (Václav Havel, 1936–2011) らとともに、チェコスロヴァキア政府に人権擁護の原則を遵守するように求める「憲章77」のスポークスマンとなり、秘密警察の苛烈な取り調べのなかで死去した<sup>12)</sup>。その遺稿は、彼に学んだ学生らによって、秘密裏にウィーンにもたらされた。彼の地下大学での講義には、最後のコメニウス論で示されたテーマが展開されている。シャラーは、1981年に彼の公刊されたコメニウス研究を集成し、ファクシミリ版で出版し、1984年にはプラハからもたらされた未公刊の草稿等の刊行も進めた。

ところで、1970年代から80年代にかけては、上述のウヘルスキー・プロト以外でも、いくつかのセミナーやシンポジウムが開催されている。1974年にはポーランドの解放30年を銘打ち、「コメニウスとポーランド」と題したセミナーが、教育学研究所の主催によって開かれた。同様のセミナーは1977年にも行われている [BČB: 131]。1982年には、コメニウス・シンポジウムが教育学研究所とユネスコの共催で行われ、文化的な発展の過程におけるコメニウスの位置づけが議論された。また、1986年には、現在はシャトー・ホテルになっているブラハの北のリブリツェの城館で「世界の学問と文化に対するコメニウスの貢献」と題したシンポジウムが開催されている。こうしたなかで、世界各国におけるコメニウスの受容等もテーマとしてとりあげられるようになった [BČB: 135]。この時期、旧東ドイツのホフマン (Franz Hofmann, 1922–2003) が、『コメニウス——諸国民の教師』 (*Jan Amos Comenius: Lehrer der Nationen*) を出版している。

冷戦下には言及されなかったが、この時期のチェコスロヴァキアでのコメニウス研究の停滞を示す事実は他にもある。国際研究誌『アクタ・コメニアナ』は、コメニウス没後300年の国際会議の内容を収録した第3号 (通巻27号) が1972年に出版されたが、次号の第4号1巻 (通巻28号1) が出たのは1979年で、発行に7年を要している。科学アカデミー哲学研究所のスタッフによれば、当時、執筆者たちのあいだでは編集の圧力に相当の不満があり、完全なコントロールとはならなかったという。

こうした状況への焦りが如実にうかがわれるのが、正常化体制下で教育学研究所長となったスカルクヴァー (Jarmila Skalková, 1924–2009) が、1982年6月15日のチェコスロヴァキア科学アカデミー第46回幹部会に提出した「1992年のコメニウス生誕400年という視点からみたコメニウス研究の学問的、政治イデオロギー的重要性」 (*Vědecký a ideově politický význam komeniologie z hlediska 400 letého výročí JAK v roce 1992*) という報告である。

「近年、資本主義諸国におけるコメニウス研究への専門的および政治的関心がきわめて強くなっていることは看過し得ないことである。とくにクラウス・シャラーによって率いられたポーフムの教育学研究所にあるドイツ連邦共和国のコメニウス研究部のような海外の研究センターに見られる重要な活動がそれである。同研究部は編集や出版に関して顕著な体制をとっており、それはわれわれのもっとも重要な優位性を脅かすのみならず、イデオロギー的闘争の分野において、憂慮すべきレベルで非マルクス主義的なコメニウス解釈をもたらそうとするものである。…守勢でとりくんでいては社会主義者のイデオロギー的・政治的学問の地位を自国においても外国においても弱めてしまうのであり、このことは、現在にあって必要とされるのは、積極的でイデオロギー的な専門家による道をとることだということを示唆している。」 [DO: 26–27]

オルシャーコヴァーが指摘するように、この報告には、チェコスロヴァキア側には、ドイ

ツのコメニウス研究が一種の脅威に映り、守勢にある自国のコメニウス研究を反転攻勢に転じさせなければならないという意図が読みとられる [DO: 27]。ここで名指しされているキャラクターは、前述のように、ボーフムのルール大学にコメニウス研究センターを設け、1970年から『コメニウス研究誌』（*Schriften zur Comenius-Forschung*, Akademie Verlag）の刊行を開始した。そこには研究論文のみならず、コメニウス関連の未公開の書簡やコメニウス最晩年の手稿『エリアの叫び』も収められた。この著作は、コメニウスの神秘主義あるいは予言信仰をうかがわせるもので、コメニウスを近代的に解釈したいという向きからすれば、できればないことにすませたいテキストともいえる。このテキストはノヴァークヴァーの編集によって1977年に『コメニウス研究誌』の第7巻に収められ、翌年にはそれに基づいた研究が『『エリアの叫び』の教育学』（*Die Pädagogik der "Mahnrufe des Elias"*）として発行されている。『エリアの叫び』がチェコスロヴァキアの『コメニウス著作全集』に収められたのは1992年であり、研究の量的な格差と研究の志向性は、いわゆる体制側には看過できない事態に映ったに違いない<sup>13)</sup>。スカルコヴァーは、「学問的・方法的に正しく武装された労働者」の数を増やすことを力説した [DO: 27]。

ベチュコヴァーは、1980年代後半の注目される研究として、カレル大学のペシュコヴァー（Jaroslava Pešková, 1929-）によるコメニウスの哲学的位置づけとともに受容の問題もあつかった研究、チェコの歴史学会の指導的立場にあり、科学アカデミーの副総裁も務めたパーネック（Jaroslav Pánek, 1947-）による研究、コメニウス解釈についてイングランドとの関係を再度強調した西ボヘミア大学のクンペラ（Jan Kumpera, 1946-）による研究のほか、パトチカの教えを受けたカトリック哲学者のソウセヂーク（Stanislav Sousedík, 1931-）によるコメニウスと17世紀哲学との関係への論及に触れている [BČB: 128]。

1989年11月、いわゆるピロード革命によって、40年にわたる共産主義政権が崩壊した。さらに、1993年にはスロヴァキアとの連邦制の解消と、政治や国家の枠組みのめまぐるしい変化が続いた。コメニウスの没後300年は1968年のプラハの春の2年後という困難な時期であったが、チェコスロヴァキアでは、コメニウスの生誕400年もこうした社会的変化のなかで迎えることになった。

まず、コメニウス研究の体制に大きな変化が見られた。革命後の財政難から科学アカデミーの研究所の統合と再編が図られ、戦後のチェコスロヴァキアのコメニウス研究の拠点であったコメニウスの名を冠する教育学研究所は廃止となり、コメニウス研究にとりこんでいた大半の研究員は哲学研究所に移り、そこに「コメニウスと初期近代の研究部門」（*Oddělení pro komeniologii a intelektuální dějiny raného novověku*）が設けられた。1990年のことである。この年には、パトチカの文書を収集・編纂するアルヒフが科学アカデミー哲学研究所に設けられている。また、国際教育史学会（International Standing Conference for the History of

Education) の第12回大会がプラハで開催され、「宗教改革と啓蒙主義の間の教育改革」というテーマのもと、コメニウス関係の分科会も設けられた<sup>14)</sup>。体制転換後、チェコスロヴァキアでは1992年に向けて多くの研究が現れるが、この年にはパーネックの『コメニウス——人間に関する事柄の普遍的な改革に向けたチェコの思想家の方法——』(*Comenius. La voie d'un penseur tchèque vers la réforme universelle d'affaires humaines*, Praha) が公刊されている。

そして、1992年には生誕400年の国際会議が「コメニウスの遺産と21世紀のための人間の教育」というテーマのもとプラハで開催された<sup>15)</sup>。また、チェコスロヴァキア国内では、コメニウスゆかりの地の博物館や記念館の模様替え等が行われ、大統領となったハヴェルが訪れた。生誕400年の記念出版としては、パーネックが編者を務めた『諸国民の教師コメニウス』(*Comenius: teacher of nations*, Praha, 1991) や、ベシュコヴァーらの編集による『コメニウスへのオマージュ』(*Homage to J. A. Comenius*, Praha, 1991) が出た。このほか、『総合的熟議』の全体が初めてチェコ語に翻訳されて出版されたのをはじめ、クンペラの『コメニウス——境目の時代の旅人』(*Jan Amos Komenský. Poutník na rozhraní věků*, Ostrava) やノヴァーコヴァーによる『コメニウスの四世紀』(*Čtvrt století nad Komenským*)、コペツキーの『言葉の芸術家としてのコメニウス』(*Komenský jako umělec slova*) なども出版されている。

生誕400年の記念行事は日本を含め世界各地で持たれた。たとえば、イングランドのシェフィールド大学では、同大学図書館が所蔵する「ハートリブ文書」のデジタル・データ化を進め、同年に国際会議を開催した。この成果は、『サミュエル・ハートリブと普遍的改革』(*Samuel Hartlib and Universal Reformation – Studies in Intellectual Communication*, Mark Greengrass, Michael Leslie, Timothy Raylor (ed.), Cambridge, 1994) として公刊され、ハートリブ文書のCD-ROMも出版された(*The Hartlib Papers*, 2 CD-ROMs, Ann Arbor, 1995; enlarged edition, Sheffield, 2002)。また、ドイツではドイツ・コメニウス学会(Deutschen Comenius-Gesellschaft)が設立され、翌年から『コメニウス年報』(*Comenius-Jahrbuch*)の刊行が開始された。ベルリン郊外のノイケルンにチェコ兄弟教団の信徒が17世紀に亡命した場所のひとつだが、この年にはコメニウス庭園の記念像がチェコスロヴァキア国会議長のドゥブチェク(Alexander Dubček, 1921–1992)によって除幕された。



パロウシュ

この時期、共産主義体制のもとでは発表の場を奪われていた研究者が業績を発表しはじめ、それまでは避けられていたテーマも積極的に扱われるようになった。その代表格としてはパロウシュ(Radim Palouš, 1924–)があげられるだろう。彼は戦後カレル大学に復帰したパトチカに学び、マサリクを研究した。憲章77の運動に積極的に関わり、パトチカの死後、そのコメニウス研究の未公開の草稿をドイツのシャラーのもとに送ったのは彼であった。ビロード革命後、1990年に

カレル大学の学長となり、4年の在任中に、高等教育改革にとりくんだ。この過程では、教授陣の人事には相当の変動があった。コメニウス研究としては、『コメニウスの神の世界』(*Komenského Boží svět*, Praha, 1992)や『異端的学校』(*Heretická škola*, Praha, 2008)がある。そのアプローチは、パトチカの晩年のコメニウス解釈を引継ぎ、コメニウスの思想の宗教性やそれに基づいた近代批判的な性格を強調するものである。

パトチカのコメニウス研究については、1996年から『ヤン・パトチカ選集』(*Sebrané Spisy Jana Patočky*)の刊行が開始され、シフェロヴァー(Věra Schifferová, 1959-)らの編集によって、その第9, 10, 11巻にコメニウス研究が収められ、チェコでもパトチカのコメニウス研究についての認識が高まっていく。

また、共産主義時代に長く教職を解かれていた歴史学者のヴァールカ(Josef Válka, 1929-)が『モラヴァのフス運動——宗教寛容——コメニウス』(*Husitství na Moravě - Náboženská snášlivost - Jan Amos Komenský*, 2005)を公刊している。彼は、フーコー(Michel Foucault, 1926-1984)の方法論をとり入れ、次世代の研究者に影響を与えた。たとえば、ウルバーネク(Vladimír Urbánek, 1963-)の『終末論・知識・政治——ビーラー・ホラ後の亡命者の思想史への寄与』(*Eschatologie, vědění a politika: Příspěvek k dějinám myšlení pobělohorského exilu*, Praha, 2008)などをあげることができる。



2007年にプラハで開催された国際会議

そして、『教授学著作全集』の出版から350年となる2007年11月、「教育文化に対するコメニウスの遺産」をテーマにプラハで国際会議が開催され<sup>16)</sup>、その内容は『教育文化に対するコメニウスの遺産』(*The Legacy of J. A. Comenius to the Culture of Education*, Prague, 2009)として刊行され、日本からの発表者4名の論文も掲載された。この会議では、チャブコヴァーとシャ

ラーが基調講演を行ったが、コメニウスの教育概念を広くとらえる必要性が強調されるとともに、コメニウスの思想の近代的な科学観への批判的契機が再評価された。ここには、『教授学著作全集』出版300年の1957年から半世紀を経た近代教育へのアプローチの変化を見ることができるだろう。

研究の基盤となるコメニウスのテキストの編纂と出版については、革命後の財政難のなかで進まない状態が続いていたが、『コメニウス著作全集』第15巻の4が2011年、9巻の2が

2013年、19巻の1が2014年に出版されている。ごく近年では、『コメニウス著作における世界の概念』(Aleš Prázný, Věra Schifferová et al, *Pojetí světa v díle Jana Amose Komenského*, 2012), 『コメニウス著作における調和の理念』(Věra Schifferová, Aleš Prázný, Kateřina Šolcová et al, *Idea harmonie v díle Jana Amose Komenského*, 2014) が出版され、チェコ内外のコメニウス研究者が寄稿している。このほか、『記憶の形——19、20世紀の文化の記憶のなかのコメニウス』(Lenka Řezníková a kol., *Figurace paměti: J. A. Komenský v kulturách vzpomínání 19. a 20. století*, 2014) は、コメニウスの表象文化論的研究として興味深い。

冷戦終結後のコメニウス研究は、とくにチェコにおいては、テーマや方法論が自由に選択できるようになったことで、多様な研究が現れた。また、国際交流の活性化が図られ、とくに近年では、哲学研究所のコメニウス部門が、メロン財団によって設立され、オックスフォード大学を中心に進められている知識人の文通の国際的なネットワークに関する研究とデータベースの構築を研究課題にあげている。

他方、哲学研究所のスタッフによれば、全体としてみたとき、チェコ国内でのコメニウスへのアカデミックな関心はやや減退しているという。この背景として、共産主義時代には支持されなかったカトリックやバロックの文化や哲学をめぐるテーマが、研究の空白域であることもあって関心を集め、国家的な支持のもとに質量ともにすでに膨大な研究蓄積のあるコメニウスは研究対象として避けられるようになっていくといったことが考えられるという。

### むすびにかえて

コメニウス研究をめぐる歴史は、その生国のチェコが置かれている微妙な位置と相まって、近代の歴史記述において国家主義・民族主義・イデオロギーがさまざまなかたちで作用していたことを示している。マサリクが、ヘルダーによってコメニウスが見出されたことに光を当てたとき、そこにはヨーロッパにおけるチェコ地域の位置づけが念頭にあったであろう。また、チャプコヴァーが、ドイツ的影響に対して概してネガティブな評価を加える一方、スロヴァキアにおけるコメニウスの思想の継承を高く評価するとき、そこには民族主義や戦後の冷戦体制におけるイデオロギー対立、そしてチェコスロヴァキアの国民統合という課題が念頭にあったことがうかがえる。オルシャーコヴァーの研究は、冷戦下には語られようのなかった状況に光を当てている点で、示唆に富んでいる。

現在、方法論やテーマが自由に選択できる状況になったチェコでは、19世紀の民族再生、20世紀前半の国民国家形成、戦後冷戦期の共産主義国家としての自覚といった目的意識を改まって顧慮しない冷めた客観的な歴史記述が基調になっている。それによって、従来は封印されてきたテーマが扱われるようになったことは評価できるだろう。しかし、個々に関心の



あるテーマをとりあげればよいということなら、それが極まっていったとき、いったい制度としての歴史研究なり思想研究にはいかなる社会的意味があるのかということが問題になっていくのではないだろうか。

日本の場合、歴史記述における客観的・実証主義的な態度は、研究レベルでは定着しているといえる。しかし、歴史が人間の生にとっていかなる意味があるのか、歴史研究者が語ることはまれであり、何かにつけてアクチュアリティーが問われるなかで、歴史の訴求力は弱まり、教育学などの応用分野における歴史研究はその存在意義すら問われかねない状況になっている。

そうして見たとき、短絡的な目的意識で歴史が書かれることが避けられるべきなのは当然としても、歴史が書かれることが及ぼす社会的な作用は、少なくとも顧慮されなければならないのではないだろうか。チェコにおいては、コメニウスをはじめ、フスマサリクらの人物が民族のアイデンティティを代表する存在として選択・記述され、それが広い意味での教育を通して国民意識のなごしかの部分を成していることは否定できない。チェコ地域におけるコメニウス研究の歴史は、歴史と歴史研究の意味を考えさせてくれる実例であるといえよう。

〔付記・謝辞〕本論文は、科学研究費・基盤研究（C）「コメニウス教育思想の再解釈に向けての基礎的研究」（平成24年～28年度）および広島修道大学派遣研究制度（2014年～2015年度）による研究成果の一部である。

本論文をなすにあたって、チェコ共和国科学アカデミー哲学研究所のコメニウス及び初期近代研究部門のヴラディミール・ウルバーネク部門長をはじめ、マルタ・ベチュコヴァー博士、マルティン・スタイナー博士から多大な助力と示唆を得た。スラムニュエークの肖像についてはプシェロフのコメニウス教育博物館のヘレナ・コヴァーヴォヴァー氏の助力によって提供を受けた。また、ウヘルスキー・プロトのコロキウムの写真についてはバラツキー大学のバヴェル・フロス教授、1970年と2007年の国際会議の写真についてはプラハのコメニウス博物館館長マルケータ・パーンコヴァー博士から使用許諾を得た。このほか、井ノ口淳三追手門学院大学教授、太田光一氏（会津大学元教授）からは、海外への派遣研究中で閲覧の難しい邦語論文をお送りいただいた。感謝申し上げたい。

本論文の執筆中、20世紀後半のコメニウス研究に多大な貢献のあったクラウス・シャラー博士の訃報に接した（2015年5月17日逝去）。謹んでご冥福をお祈り申しあげる。

#### 註.

- 1) 日本におけるコメニウス研究史の検討としては、井ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』（ミネルヴァ書房、1998年）の序章がある。また、北詰裕子が、『コメニウスの世界観と教育思想——17世紀における事物・言葉・書物——』（勁草書房、2015年）序章第2節で日本を中心にしたコメニウス研究史の概観を試みている。
- 2) 鈴木琇雄、『コメニウス「大教授学」入門』上（明治図書出版、1982年）に全文の翻訳が示されている。

- (24～27ページ)。
- 3) Zdeněk Nejedlý, *Komunisté — dědici velikých tradic českého národa, Praha*, 1954, str.53, 54.
  - 4) この行事の記録は、『国際理解の教育』（長田新編，育英書店，1959年）に収録されている。
  - 5) この大学は，ヨーロッパ諸国の植民地だったアジア，アフリカ，ラテン・アメリカ等のいわゆる第三世界からの学生を東側諸国が受け入れるために設立された大学のひとつ。1961年の設立で，受け入れた学生のマルクス主義化が図られた。設立の経緯から，翻訳や通訳の教育に力が注がれていた。費用対効果が見合わない等の理由から，1974年に廃止された。
  - 6) 鈴木秀勇「ヤン・フスおよびヤン・アモス・コメンスキー研究の問題点——チェコスロヴァキアにおける研究状況をめぐって——」(一)，『一橋論叢』第54巻第3号，1965年。および「ヤン・フスおよびヤン・アモス・コメンスキー研究の問題点——チェコスロヴァキアにおける研究状況をめぐって——」(二)，一橋大学研究年報『社会学研究』8，1966年。
  - 7) 同書は，*Education of Young Children in the Concept of Universal Life-long Education in the Work of J. A. Comenius (Komenský)*, Praha, 1973. の表題で英語版も出版されている。
  - 8) チャプコヴァー，ベチュコヴァー両氏による著作の執筆時は，パトチカは検閲対象であり，チェコスロヴァキアの公的出版物には扱われない時期にあった。ベチュコヴァー博士に照会したところ，同書が出版されたポーランドはチェコスロヴァキアに比べ検閲が緩かったという。
  - 9) 堀内守，「コメニウス『大教授学』——すべてを教育の相のもとに」，梅根悟・長尾十三二・編，『教育学の名著12選』，学陽書房，1974年，39ページ。
  - 10) オルシャーコヴァーの著作にも，フロスが陰に陽に受けつづけた圧力が回想されている。また，ヴァールカによるフロスの果たした役割に対する評価も掲載されている [DO: 31]。
  - 11) この経緯については，両者の書簡にうかがわれる (Helga Blaschek-Hahn, Vera Schifferová (Hrsg.), *Jan Patočka - Klaus Schaller - Dimitrij Tschizewskij: Philosophische Korrespondenz 1936-1977*, Würzburg: Koenigshausen & Neumann, 2010.)。
  - 12) 憲章77に対しては，体制側から反憲章77の運動が起こされた。オルシャーコヴァーによれば，教育学研究所の多くの研究員は，所長の不満にもかかわらず，反憲章77への署名を拒否したという [DO: 41]。
  - 13) 1970年以降のチェコスロヴァキアでの研究体制の遅れとシャラーを中心とした旧西ドイツの研究の進展への警戒感，ポリシェンスキーによっても示されていた。彼がシャラーの研究所報を分析したレポートが残されている [DO: 24-25]。
  - 14) この学会の模様については，太田光一が報告している（「国際教育史学会に参加して」，『教育学研究』，57巻4号，1990年，51～56ページ）。
  - 15) 同会議の模様については太田光一が報告している（「コメニウス生誕四百年記念の旅——平成3年度海外研修報告——」，『会津短期大学研究年報』，第50号，1993年，12～14ページ）。また，1992年の日本教育学会ラウンドテーブルでも，同国際会議の様子が紹介された。このほか，井ノ口淳三による『朝日新聞』（1992年4月10日付）紙上の紹介記事がある。
  - 16) この会議の概要については，拙稿「コメニウス『教授学著作集』発刊：350年記念国際会議に出席して」（『教育学研究』，第75巻2号，2008年，101～102ページ）で紹介した。

### 主要参考文献

- Bečková, Marta, Čapková, Dagmar, Bienkowski, Tadeusz (1991): *Znaomosc dzieł Jana Amosa Komenskigo na ziemiach czeskich, slowackich i polskich od połowy XVII w. do czasów obecnych*, Warszawa: Polska Akademia Nauk, Instytut Historii Nauki, Oświaty i Techniki.
- Floss, Pavel (2012): *Meditace na royhraní epoch*, Brno: Centrum pro studium demokracie a kultury.
- Olišáková, Doubravka (2012) *Niky české historiografie*, Praha: Pavel Mervart.

## SUMMARY

### An Essay Concerning the History of the Comenius Study

Shinichi Sohma

Comenius study was developed in the process of Czech National Revival in the 19th century. In this paper, the author examined main trends in the Comenius study, which was conducted mainly in Czech lands. On the one hand, in particular, since the early 20th century, the discoveries and compilation of the texts of Comenius brought the foundation for the further study. On the other hand, since Comenius was regarded as one of the symbolic figures for national integration of Czechoslovakia, the study was often strongly influenced by nationalism and political ideologies. After the termination of the Cold War, the historical study of the Comenius study reveals the situations, in which the Comenius study under the communist regime was positioned. Those studies give suggestions to reconsider the Comenius study during the Cold War. After the end of the Cold War, on the one hand, the theme and methodology is greatly diversified, on the other hand, the image of Comenius also diversified and the purpose of the Comenius study comes into question. The history of the Comenius study in Czech lands might be seen an important example to consider the meaning of history and historical study.